

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 6 月 19 日現在

機関番号：23901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2016

課題番号：24531014

研究課題名(和文)人間関係に困難を抱える幼児の小学校への移行期における異年齢保育による援助方法開発

研究課題名(英文) A Study on the Support Method for Young Children with Difficulties in Human Relations in the Mixed Age Group of Preschool during the Transition to Elementary School

研究代表者

山本 理絵 (YAMAMOTO, Rie)

愛知県立大学・教育福祉学部・教授

研究者番号：60249282

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：幼稚園・保育所から小学校への移行期において、人間関係に困難を抱える幼児に対して、異年齢保育を通してどのような援助方法が有効か、異年齢クラスにおける3～6歳児の継続的縦断的観察及び保育者等からの聞き取り調査結果の分析により明らかにした。効果的な活動内容・参加形態・環境設定・保育者の働きかけ、スウェーデン等で行われているような教育ドキュメンテーションに基づくプロジェクト的活動、保護者や多職種との連携による小学校への移行システムの整備等について明らかになった。

研究成果の概要(英文)： This study aims to propose the method for supporting young children with difficulties in human relations in the mixed age group of preschool during the transition to Elementary School. This research examined the 3-6-year old children's development and human relations, through the longitudinal observations of the mixed age groups and interviews with the teachers of nursery schools.

The support method is clarified from the aspects of effective contents and participating styles of children's activities, setting up the environment, teacher's guidance, pedagogical documentation and project activities like that are practiced in the Swedish preschools, and transition system through cooperation with parents, schools and the various types of professionals.

研究分野：教育学・幼児教育学・教育方法学

キーワード：人間関係 発達障害 異年齢保育 幼小連携 縦断調査 発達支援 幼児教育 プロジェクト活動

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 幼児期の発達障害児等の支援に関する研究動向及びこれまでの研究成果

インクルージョン・特別なニーズ教育の世界的な動向を受け、2007年度より学校教育法の一部改正により、特別支援教育制度がスタートし、幼児期からの特別支援教育・早期発見・早期支援が求められている。また、2012年度から障害者自立支援法等の改正により、保育所等訪問支援の創設など、障害児支援が強化された。しかし、幼稚園・保育所等においては、発達障害、あるいはその疑いがある多動・衝動的な傾向を含む「人間関係に困難を抱える子ども」及びその家族への援助の方法にまだまだ戸惑っている状況があった。

学齢期に比べて幼児期においては、発達障害については早期発見の難しさもあり、対応方法も十分検討されていなかったが、近年、幼稚園・保育所などの集団保育の場における援助方法に関しても、実践に基づく事例が少しずつ報告されるようになってきた。

我々は、幼稚園・保育所における事例研究から「子どもの変化」「保育の難しい子ども」を理解し援助する視点を検討してきた。さらに、「多動・衝動的傾向を示す幼児の保育の場における援助方法・システムの開発」を行ってきた。幼児期の特別支援教育における、子どもの理解と集団活動における配慮・援助の工夫、集団での関係づくり・学級づくりのための理論と指導のポイントを、先進的な実践・事例の考察をもとに提起してきた。また、集団保育・療育場面での自閉症幼児に対する絵本を介した発達支援の方法や、幼稚園・保育所における障害のある幼児に対応した支援体制の実態と課題を、とくに巡回指導・相談の視点から明らかにしてきた。

### (2) 幼稚園・保育所から小学校への移行期の発達障害児の支援に関する研究動向とこれまでの研究成果

幼稚園教育要領・保育所保育指針では、幼保・小の連携が強調されている。早期からの教育相談・支援と就学移行期における継続的な就学相談・指導の重要性も指摘されており、発達障害等により人間関係に困難を抱えている子どもたちの幼稚園・保育所等から小学校への移行期に、必要な支援を明らかにすることが課題となっている。小学校への移行期の支援としては、近年学会でも取り上げられるようになり、関心が寄せられている。また、我々は、小学校入学前後の、とくに多動・衝動性や広汎性発達障害傾向を持つ子どもの学校・生活状況や親の不安と支援ニーズについて調査研究を進めてきた。その中で、4歳半の時点で「友達とのごっこ遊びができない」など、社会性や園不適応項目で問題があった子どもたちに、小学校1年生時点で、高機能広汎性発達障害の傾向が高いことが明らかになった。

北欧諸国では、基本的に異年齢保育を行っ

ており、近年では就学前1年間を就学前教育と位置づけ、小学校との接続をスムーズにする制度改革が行われている。これらの研究成果も日本では十分検討されておらず、どのような形で取り入れられるかは今後の課題である。

### (3) 異年齢保育に関する研究動向とこれまでの研究成果

一方で、わが国の保育の場では、近年「異年齢保育」が見直され、新たに組み込まれる保育所も少なくない。日本でのこれまでの幼稚園・保育所における発達支援の方法に関する研究は、基本的には同年齢集団を前提としているが、同年齢の集団の中ではうまく人間関係を結べない子どもも、異年齢集団の中では、異なる様相がみられる。しかし、その具体的支援方法は明らかではなく、小学校への移行期の保育のあり方についても検討課題とされている。本研究の研究代表者は、全国の異年齢保育実践の検討に関わり、その理論と実践について研究してきた。異年齢保育の中では、多様なでき方・多様な参加のしかたを保障することによって、差異・異質なものを受け入れ、相手の立場に立って振舞うことができるようになり、自己肯定感が育ちやすいことが明らかになってきている。

また、米国での研究によれば、異年齢集団が「虐待」の範疇の子どもにとって、治療的・矯正的效果があり、自己コントロールを身につけやすくすることが示唆されているが、日本ではあまり注目されていない。(Lilian G.Katz, Demetra Evangelou and Jeanette Allison Hartman(1990))

本研究は、幼児期の発達支援研究と幼小連携に関する研究、異年齢保育に関する研究の3者の交差点に位置し、これらの関連性に着目し総合的に検討しようとするものである。

## 2. 研究の目的

(1) 幼稚園・保育所から小学校への移行期において、人間関係に困難を抱える幼児が異年齢集団保育において、どのように変化・発達していくか、3, 4歳から小学校低学年までの変化を明らかにする。

(2) 異年齢保育において、どのような援助方法が有効か - 集団・グループのサイズ、保育目標、活動内容、参加の形態・方法、活動時間帯、周りの子どもたちとの関係、保育者の働きかけ、年齢による違い等を明らかにする。

(3) 上記に関連する、保育者以外の専門家や小学校・他機関との連携や保護者との連携の方法についても視野に入れて検討することによって、援助方法を開発する。

## 3. 研究の方法

(1) 人間関係に困難を抱える幼児が在籍し

ており、異年齢保育を実施している幼稚園・保育所での、保育実践の継続的観察、及び保育者等からの聞き取り調査により、保育者の働きかけと対象児の変化、クラス集団の変化を記録・分析して、保育者の有効な援助方法を検討する。

人間関係の変化を捉える視点としては、a. 甘え - 甘えられ・頼りにされる関係、b. 憧れ - 憧れられ、c. 認めあう関係、d. 教えてほしい - 教えてあげる関係、e. 要求しあい、鍛えあい、励ましあう関係を設定した。その中で、子どもに安心感、受容・承認、援助・自己調整、自尊感情が発展しているか、分析する。

対象児童を小学校低学年まで3、4年間縦断的に追跡調査するとともに、保育者以外の専門家や小学校・他機関との連携や保護者との連携についても視野に入れて検討する。

(2) 国内外の異年齢保育及び幼児期の発達障害への支援方法に関する資料を収集するとともに、スウェーデン、フィンランドの就学前教育・保育施設において、異年齢保育・発達障害児の支援方法、小学校への移行支援の方法について実際に観察・聞き取り調査を行い、日本の保育において有効な援助方法を検討する。

本研究にあたっては、愛知県立大学研究倫理審査委員会の許可を得、研究協力者に承諾を得ている。

#### 4. 研究成果

##### (1) 事例研究(1)より

知的発達全般に多少の遅れがあり集団に入ることが難しかった4歳児が在籍する3歳から5歳の異年齢クラス集団の2年間の変化を分析した。周りの子どもたちも自分たちがされてきたように集団に入りにくい友達をも自然に受容しており、甘え 甘えられる関係、憧れ 憧れられる関係、認め合う関係、教えてほしい 教えてあげる関係の中で、その子どもも他を受容・承認し、友達を援助しようとしたり、自己主張と周りの要求とを自己調整しようとしたりする姿がみられるようになった。また、本児も年長になるころからは年少の子をかわいがったり気かけたりするようになり、甘えられたり、憧れられ、慕われる側になっていき、5歳児としての自覚や自己肯定感が育っていった(論文参照)。

この事例を通して異年齢保育においては、以下の方法が重要だと示唆された。

絵本、衣装や小道具などを用いて、年長児等のやっていることを見えやすく見通しをもちやすく、模倣しやすくし、年長児に支えられて安心感をもって意欲的に活動に取り組めるように援助すること、きまった歌と振りで模倣しやく友達とのかかわりをつくりやすいわらべうたが効果的であること、興味をもて達成感もてる活動や玩具(型は

め、パズル、粘土、ブロック)を用意すること、食事などの場面において小グループで生活すること、できたことを実感できるようにほめたり、見て真似したり自分もやってみたいと思えるようになる環境を設定すること、活動内容や方法をわかりやすく伝え、保育者がやって見せたり一緒に行ったりすること。

##### (2) 事例研究(2)より

落ち着きがなく、相手の気持ちに気づくことや自分の要求を出すことが難しく、トラブルになることが多かった4歳児の、1歳から5歳の異年齢クラスにおける2年間の変化を分析した(論文参照)。

本児は、次第に自分のやりたい活動を意識し、主張できるようになるとともに、友達にも気づき、友達の意見を聞きつつ自分の意見を調整したり、集団の意見を調整しようとリーダー的に振る舞ったりするようになっていった。また自分より年下の友達にも指示を出したり、援助したり、譲ってくれたことを認め感謝するようになり、小さい子から頼りにされ自尊感情が育っていった。

異年齢集団が及ぼした影響や保育者の手立てとしては、以下の点が重要である。

年下の子が起こすトラブルを見て、自分を客観的に振り返ることができた。

砂遊びや鬼ごっこ、プール遊びなどをやってみせ、視覚的にわかりやすくすることで意欲的に取り組むことができた。

楽しく活動に取り組み、達成感や自信が得られた体験と、やりたいことを保育者が丁寧に聞き取り、さらに集団みんなにやっていたか聞くように促したことから、やりたい活動を主張することができるようになっていった。話し合うときは、出た意見をホワイトボードに書くなど、わかりやすくし、考えやすくした。

一人で遊んでいても、年下の子どもが寄ってきて真似をして遊ぶことから、次第にかかわりが生まれ、リーダー的なかわりにつながった。

異年齢の一定期間固定した小グループで食事をとるなどしたこと、他の友達に気づき、1、2歳児を気にかけるようになり、5歳児としての自覚も育っていった。朝のあつまりを、1、2歳児でも興味がわくようなやり方で行うことによって、クラス全体が集まって楽しく行うことができ、小さい子から慕われ頼りにされるようになっていった。

##### (3) 事例研究(3)より

自分がうまくできないと思うと怒って暴力的な行動をとってしまったり、目に入った物や感覚的な刺激に反応してしまったり、自分の思いを言葉で表現することが苦手だった3歳児の、1～5歳の異年齢クラス集団における3年間の変化を分析した。本児は年上

の友達を真似して遊び、保育者を支えに少々乱暴でも周りに自分の気持ちを受け止められることにより、友達の気持ちを思いやったり、行動をコントロールしたりできるようになっていった。

3歳児期では、自分を受け入れてくれる保育者と自分との関係から数人の4,5歳児との関係ができ、4歳児期では集団に受け入れられていると感じ、友達を求め、ルールが簡単な集団遊びに参加できるようになった。5歳児期では、クラスの中での自分の位置を意識するようになり、クラスみんなで行うクッキングなどをしてほしいと要求し、他クラスにもおすそ分けをして感謝され喜ぶようになった。さらに、周りの集団が、本児に反論したり、彼の気持ちを考えて動くようになったりし、ままごとやお医者さんごっこなどを小さい子も含めて楽しめるようになった。集団遊びではリーダー的に振る舞い、教えてあげるようになり、自尊感情も育っていった(論文 参照)。

1歳児とはどのようにかかわってよいかわからず暴力的になることもあったものの、3歳児期から抱っこして甘えさせるようになり、4歳児後半期には1歳児から「好き」と言われ、安心感をもち、小さい子が困っていると手助けするようになった。小さい子からも、憧れ、頼られ認められる関係になり、年長児としての自覚もでてきた。本児が年長児に抱っこされたりして甘える姿はほとんどみられなかったが、1歳年上の子と同じことを真似してやろうとすることで甘えていたと考えられる。言葉で表現することが苦手だったので、教えたり、励まし合ったりする姿も多くは見られなかったが、1歳年下の子は、本児に憧れてついてきたり、同じことをして遊ぶようになるようになり、彼もそれを受け入れるようになった。その過程では以下の点が重要であったと考えられる。

魅力的な遊びをしている年上の友だちの真似をしたり、遊びに目的を持てるように配慮して保育者が声をかけた。

保育者が一対一で関わる場もつくりながら、子どもの気持ちを推察し聞き取り受け止めることで、周りの子にも受け止められるようになった。またその子の気持ちを代弁したり、言い方を伝えたりすることで、自分でも言えるようになっていった。

活動や鬼ごっこのルールや散歩の行き先(公園)についての話し合いにホワイトボードを使用し、視覚的にもわかりやすくすることで、参加への意欲を高めた。クッキングも目で見てわかりやすく達成感のもてる活動だった。

食事の際は、グループを小さくすることで、友達が見えやすくなり、1,2歳児を手助けし憧れられたりすることにつながった。その子が今やっている活動を肯定的に意味づけ、やりたいと言う活動を実現させるように援助した。

朝のあつまりを、1,2歳でも興味がわくようなやり方で行うことによって、クラス全員が集まって楽しく行うことができ、低年齢児から慕われ頼りにされるようになっていった。

#### (4) 事例研究(4)より

3歳児期から朝の身支度・あつまりになかなか参加できず、一人遊びやトラブルの多かった子どもが、3~5歳児の異年齢クラスで、5歳児期に迷路づくりから“病院ごっこ”に参加していく過程を分析・考察した。本児は、夢中になれるプロジェクト的活動の中で、お互いのアイデアを認め合い、自己コントロールや自尊感情も高まっていった。その際の保育者の支援方法としては、以下の点が明らかになった(学会発表 参照)。

身支度をせかさず、できたことを認めていき、好きな遊びを少人数で楽しめる時間と空間があったことから、その活動が異年齢クラス全体の活動につながっていった。

保育者は子どもたちの活動についてドキュメンテーションを作成しながら、子どもたちのやりたい思いをよく聴いて、その願いを実現できるように、クラスで相談したり材料を用意したりして援助した。

年齢や特性の違いによる個々の興味やアイデアを活かした参加に配慮し、遊びながら必要なものを作り、イメージを膨らませながらまた遊ぶという繰り返しや、写真や実物の聴診器などを目に見える形で提示したことも、興味や意欲を高めた。

#### (5) 事例研究のまとめ

事例研究(1)~(4)の結果から、共通して以下の点が明らかになった。

異年齢集団では、年齢差があり幅の広い関係がつくられることから、人間関係に困難を抱えている子どもも、甘えたり教えてもらったりしながら、受け入れられ、安心して、年上の子のやっていることを見て憧れて真似するなかで、達成感や自信をもちやすい。また、一人で遊んでいても年下の子どもが興味をもって寄ってくることによって、かかわりができていた。そのような子どもも、年長になると、下の年齢の子どもを気にかけて、教えてあげたり、世話や援助をしてあげたりするようになり、憧れられ、集団の活動に見通しを持って参加するようになり、自己コントロールや自己肯定感がみられるようになる。

活動内容・参加の形態としては、自由遊びでその子どもが興味をもってやっていることを肯定的に意味づけることで、友達を巻き込んで意識的な活動に発展させることができる。また、見えやすく模倣しやすい「わらべうた」、決まったやり方で達成感を持ちやすいパズル等や、見てわかるクッキングなどに積極的な参加が見られた。クラス集団のサイズは20人以下であった

が、さらに小グループでの食事や好きな遊びが同じ少人数での活動が保障されることによって、友達のことが見えやすくなる。

保育者の働きかけとしては、友達の活動を見えやすく、模倣しやすくするように、注目させたり、テーブルの配置等を考慮したり、鬼ごっこではルールがわかりやすいように帽子を区別したり、ごっこ遊びでは目に見える道具を作ってイメージを膨らませたり、話し合いではホワイトボードに絵を描いたりしながら説明するなど、視覚的な工夫が見られた。

保育者は子どもが興味をもって遊んでいることを見逃さず観察し、子どもたちの声を聴きドキュメンテーションを作成することによって、それぞれの子どもの特徴や興味に応じた多様な参加のしかたを保障し、子どもたちの願いに沿った活動を展開することができ、対象児も積極的に参加するプロジェクト的活動に発展させることができる。

これらの方法は、同年齢集団でも行われることであるが、年齢差のある異年齢集団ではより重視される必要がある。

保育者は、対象児との関係において、思いを受け止め、認めることによって信頼関係をつくり、さらに友達や集団とつなげる役割を果たしていた。そのことによって、集団の子どもたちがその子の特性に配慮したかわりを考えたり、認めたりして受け入れていた。異年齢保育においては、保育者の直接的援助のみならず、集団そのものもつ支援力・教育力も長期的なスパンで効果的に作用し、相互受容的・承認的關係、相互援助的關係が築かれ、自己肯定感が育ちやすくなるといえる。

年齢による違いについては、1, 2歳児がいることによって、4, 5歳児が無条件にかわいがる関係ができる。攻撃的な行動が多かった3歳児も、1~5歳の異年齢集団では4歳ごろから、食事の際などに1, 2歳児の世話をするようになり、憧れられるようになり、認められて安心し安定する姿が見られた。ただし、活動内容としては、朝の集まりなどでは、1~5歳児全員が一緒に集まるためには、年齢に配慮した内容・方法が考えられる必要がある。また、同年齢の人数が少ないことから、憧れてモデルとなるような年長児がいない場合もあり、他のクラスとの交流の進め方なども検討課題である。

#### (6) スウェーデンにおける小学校への移行期の教育方法に関する調査より

スウェーデンでは、保育園が就学前学校となり、1998年に就学前学校のカリキュラムが作られ、その後学校法の改正に伴って2010年に改訂された。2011年には「基礎学校、就学前クラス、学童保育のためのカリキュラ

ム」が作成され、就学前クラス（ゼロ年生）を含んだ学校の全体的な目標とガイドラインと基礎学校のカリキュラムが定められた。それは、2016年夏に就学前クラスと学童保育の独自のカリキュラムが追加され改訂された。

2016年にスウェーデン・ストックホルム市郊外の就学前学校の4, 5歳児のクラス及び就学前1年の「ゼロ年生」クラス（6歳児）の教育・保育の実際を観察するとともに、担任教師から聞き取り調査を行ない分析・考察した結果、以下のことが明らかになった（論文参照）。

保育者は民主主義的価値と安心感・自己肯定感を重視し、子どもが安心して生活でき、様々な活動に挑戦し自信をつけることができるように援助している。

子どもたちの遊びが大事にされ、興味・関心・知的好奇心に基づいた、身体全体を用いた探究的プロジェクト活動を通して子どもたちの多様性を認める保育・教育がなされていた。そのなかで、子どもたちの想像力、洞察力、創造性、自信などを伸ばすことがねらわれて実践が試みられていた。プロジェクト活動の前提となるのは、子どもたちを観察し、子ども同士で話している言葉やつぶやき、子どもたちの活動を文字や写真で記録し、記録に基づいて話し合う、教育ドキュメンテーションである。スウェーデンではドキュメンテーションの作成が義務付けられており、その具体的な作成・活用方法について知ることができた。

#### (7) 小学校への移行期の教育支援体制

幼児期から小学校への移行期の教育支援体制については、スウェーデンでは、フィンランドと似たシステムで、「ゼロ年生」を置くことによって、スムーズに小学校での学習に移行することができるようになっている。就学前学校の教師、ゼロ年生の教師、小学校の教師、特別支援教育の専門家、保護者が密に連絡をとり、発達を継続的に支援できる体制ができています。

日本でも幼小の接続が工夫されているが、小学校への引き継ぎがうまくいかない事例も多い。観察対象とした事例では、入学前に保育園で配慮し、保護者や小学校と連携をとり、配慮事項を引き継いでいたことにより、入学後は、比較的スムーズに学校生活に慣れることができていた。しかし、保育士の努力によるところが大きく、システムとしては整備が不十分である。

その中でも、多職種が連携して5歳児健診やそのフォローの教室等を実施することによって、小学校とうまく連携している先進的な自治体もあった（論文参照）。また、発達障害を抱える学齢期の子どもたちの、学校外での遊び・余暇の場で、より充実した人間関係を結んでいっている事例もあった。

## (8) 総括と今後の展望

上記のような支援体制のもとに、(5)にまとめたような異年齢集団を効果的に作用させる実践的方法を用いることによって、保育者及び支援者が見通しをもった保育・援助を行うことが可能となり、人間関係に困難を抱える子どもへの支援も進むことが予想される。とりわけ、活動意欲が乏しかった幼児が自分の興味に基づいたプロジェクト的活動に積極的に参加し人間関係を結んでいく姿からは、クラス集団における活動の設定のしかたに大きな示唆を得ることができた。

当初、4年間の研究計画であったが、スウェーデンにおける調査については、相手先との関係で、1年延期した。しかし、ちょうど、カリキュラムが改訂される年であったため、小学校へのつながりについてもより有益な資料を得ることができた。

教育ドキュメンテーションの過程で、保育者同士、保育者と子ども、子ども同士、保護者と子ども・保育者の間で、活動を振り返ることによって、最も子どもたちに合った方向性を見出していくことができる。日本ではまだあまり取り入れられていないが、教育ドキュメンテーションを行いながら、プロジェクト的な活動に発展させる過程で、子どもたちがより意欲的に活動に参加し、多様な関係が発展するものと考えられる(論文、発表、図書参照)。今後、さらに、教育ドキュメンテーションとプロジェクト活動の過程における子どもたちの関係の発展と支援方法を具体的に明らかにしていきたい。

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計20件)

山本理絵・松川礼子・近藤みえ子、人間関係に困難を抱える幼児の異年齢保育における支援(3)、愛知県立大学教育福祉学部論集、査読無、64号、2017年、63-78

DOI : 10.15088/00003052

山本理絵、小学校への移行期の生活と保育・教育方法に関する一考察 - スウェーデンにおける教育ドキュメンテーションとプロジェクト活動の調査から -、人間発達学研究、査読有、8号、2017年、71-87

DOI : 10.15088/00003062

瀬野由衣・三山岳・山本理絵、幼児期からの就学移行相談・支援体制に関する研究 - 就学・発達相談担当者への聞き取り調査結果のまとめ(中間報告) -、生涯発達研究、査読無、9号、2017年、61-70

山本理絵・原朋子、力強い「子どものイメージ」: レッジョ・エミリア・アプローチの原理(翻訳と解説)、人間発達学研究、査読有、7号、2016年、123-135

DOI : 10.15088/00002626

山本理絵・松川礼子、人間関係に困難を抱える幼児の異年齢保育における支援(2)、愛知県立大学教育福祉学部論集、査読無、64号、2016年、111-120

DOI : 10.15088/00002510

山本理絵・藤井貴子、人間関係に困難を抱える幼児の異年齢保育における支援(1)、愛知県立大学教育福祉学部論集、査読無、62号、2015年、99-110

DOI : 10.15088/00002233

[学会発表](計15件)

山本理絵 他、人間関係に困難を抱える子どもの異年齢保育における支援(4)、日本保育学会第70回大会、2017年5月21日、川崎医療短期大学(岡山県倉敷市)

山本理絵 他、人間関係に困難を抱える子どもの異年齢保育における支援(3)、日本保育学会第69回大会、2016年5月7日、東京学芸大学(東京都小金井市)

山本理絵 他、人間関係に困難を抱える子どもの異年齢保育における支援(2)、日本保育学会第68回大会、2015年5月9~10日、椙山女学園大学(名古屋市)

山本理絵 他、人間関係に困難を抱える子どもの異年齢保育における支援(1)、日本保育学会第67回大会、2014年5月17日、大阪城南女子短期大学(大阪府大阪市)

Finbar Burke, Rie Yamamoto, Reflections attempt to plan and implement respectful, responsive learning experiences. The 65th OMEP World Conference, 2013年7月11日、上海(中国)

[図書](計5件)

山本理絵、子どもとつくる5歳児保育 - 本気と本気がつながって、ひとなる書房、2016年、総191

白石淑江・水野恵子、スウェーデン 保育の今 - テーマ活動とドキュメンテーション、かもがわ出版社、2013年、総203、(1-148)

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

山本 理絵 (YAMAMOTO, Rie)

愛知県立大学・教育福祉学部・教授

研究者番号 : 60249282

(2) 研究分担者

別府 悦子 (BEPPU, Etsuko)

中部学院大学・教育学部・教授

研究者番号 : 60285195

(平成24年度までは連携研究者)

(3) 連携研究者

白石 淑江 (SHIRAISHI, Yoshie)

愛知淑徳大学・福祉貢献学部・特任教授

研究者番号 : 10154361

(4) 研究協力者

藤井 貴子 (FUJII, Takako)

松川 礼子 (MATSUKAWA, Reiko)

近藤 みえ子 (KONDO, Mieko)